

# デジタルアーカイブ 推進コンソーシアム Newsletter

## No. 05

### CONTENTS

#### Europeana Network Association 年次総会参加報告（抜粋）

##### 『ハーバード大学での図書館とアーカイブの経験』

吉見 俊哉 東京大学大学院情報学環教授

##### 活動予定

##### トピックス



デジタルアーカイブ推進コンソーシアム  
**DAPCON**

1. Europeana について  
最近 Europeana への関心が高まっている。知的財産本部のデジタルアーカイブの連携に関する関係省庁等連絡会、実務者協議会の報告書、「我が国におけるデジタルアーカイブ推進の方向性」[1]においても、このモデルとして取り上げられている。

表 2. Europeana 理事一覧 (2016/2/26 現在) [3]

	理事	所属
創設会員	Agnes Magnien	Natio
	Concha Vilasino	Min
	Max Kaiser	As
	Uldis Zariņš	N
	Paul Keller	

## Europeana Network Association 年次総会参

開催日時：2017年12月6日  
開催場所：イタリア ミラノ市（レオナルド・ダ・ヴィンチ記念国立科学技術博物館）  
報告：2018年2月28日  
時実象一  
東京大学大学院情報学環

時実象一氏（東京大学大学院情報学環 高等客員研究員）の Europeana 状況レポートより抜粋して掲載します。

## 1 Europeana について

最近 Europeana への関心が高まっている。知的財産本部のデジタルアーカイブの連携に関する関係省庁等連絡会、実務者協議会の報告書、「我が国におけるデジタルアーカイブ推進の方向性」においても、Europeana がひとつのモデルとして取り上げられている。

### 1.1 Europeana の運営

#### (1) 組織

Europeana の運営は Europeana Foundation によって行われている。Europeana Foundation は主として EC の予算で運営されている財団である。

Europeana Foundation はいわばネットワーク組織である。理事会は創設会員 2 名、コンテンツ所有機関代表 4 名、協議会理事 6 名、有識者 4 名、EU 加盟国大小 3 名の合計 19 名からなり、図書館・博物館などの代表からなっている。

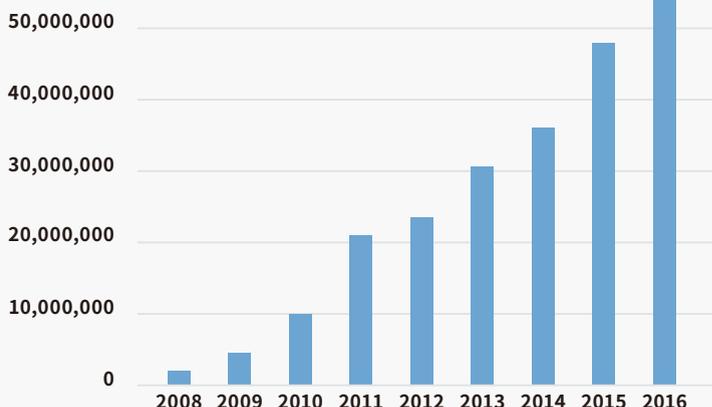
#### (2) 予算

Europeana Foundation の収入は 2015 年には 7000 万ユーロに近づいている。ほとんどが EU 等からの補助金であり、事業収益というものはない。

### 1.2 Europeana の仕組み

Europeana は一種のポータルである。デジタル・コンテンツは EU 各国にあるコンテンツ・プロバイダが保有しているが、そのメタデータを Europeana が収集し、API を用いてウェブで公開している。データ提供者は 2015 年 7 月現在 152 機関ある。こうして集められたメタデータの数の推移は図のとおりであるがほぼ直線的に伸びている。

Europeana のメタデータ数



## 2 Europeana Network Association (ENA) 年次総会参加報告

### 2.1 ENA とは

Europeana Network Association(ENA) は各国の Europeana 協力機関や個人の集まりであり、運動体としての Europeana の中核をなすものである。ENA は Europeana に 6 名の理事を出している。ENA は毎年年次総会を開催しているが、今回これに参加する機会を得たので報告する。開催日時は 2017 年 12 月 6 日、開催場所はイタリアのミラノ市である。

### 2.2 ENA 総会

#### (1) 基調報告

「文化の価値」ピエール・ルイジ・サッコ, ミラノ大学文化経済学教授 Sacco 氏によれば、Culture 1.0(Patronage) は文化が好事家のサポートで成り立っていた時代である。この時代には博物館が知識の寺院となっていた。文化遺産は専門家のためのものであった。一方 Culture 2.0(CCI) は文化資源が著作権で守られ、娯楽が主流となり、商業化した時代である。利用者の反応と収益性が一番重要となる。博物館は娯楽の機械になる。文化遺産は顧客のためのものである。現在の Culture 3.0(Open communities of practice) は制作者と利用者の境目があいまいになり、文化が集散的なネットワークになった時代である。これは技術の発展に支えられている。博物館は参加のためのプラットフォームとなる。文化遺産がコミュニティによって作成され、保存され、活用される時代となった。

#### 「Playbook の使い方」ハリー・フェアウェイアン, Europeana 事務局次長

現在 Europeana では Europeana Playbook というパンフレットを作成し、協力機関が Europeana の有用性を測定することを支援している。有用性を証明することは、各機関が予算を獲得するために必須である。

#### 「CulturalItalia」サラ・ジョルジオ

CulturalItalia はイタリアの国家アグリゲータである。2008 年に開発、広い分野をカバーしている。現在 37 パートナーと 98 博物館・美術館、115 図書館、190 文書館から 320 万件のメタデータを収集している。同時に、MuseiD-Italia を通じて 6250 博物館・美術館の 638 コレクション、95000 デジタル・コンテンツを統合している。そこから Europeana に 280 万メタデータ提供している。



European Network Association 総会の様子

## (2) 現場からの報告

### (a) CineRicordi, イタリア

1950年代のイタリアの映画の歴史を知るためのサイトで、150件のビデオ・インタビューを収録している。

### (b) Platsminnen, スウェーデン

Platsminnenは認知症の患者に昔の写真を見せることにより、記憶を取り戻させるためのiPadアプリである。データとしてはEuropeanaその他のデータを使うほか、自分の写真も追加できる。

### (c) Smart Square, ドイツ

ハンブルグ市の見捨てられた地域を地域の人を巻き込み、Digital Cultural Storytellingで再活性化するプロジェクトである。

### (d) Transcribathon, ドイツ

手紙など手書きの文書を翻刻するプロジェクトで、一か所に集まって一斉におこなう。さまざまな場所でおこなわれているが、ルーマニアでは、Dumitru Nistorという兵士の日記を、4カ所、22チーム、66人の参加により、1週間で100万文字を翻刻し、出版にまでこぎつけた。

### (e) Yum! The impact of digitized medieval manuscripts, オランダ

オランダのライデン大学Scaliger Instituteでは、中世の文書をデジタル化し、これを教育に使うことを試みている。Erik Kwakkel教授はツイッターにより、広い範囲の関心を獲得している。

### (f) Square Museum, オランダ

Square Museumは街の広場に置く電話ボックスのような箱で、そこでさまざまな文化遺産を液晶モニターで表示する。複数の町に置かれたSmart Squareはネットワークで結合しており、インタラクティブにお互いの情報を交換できる。

### (g) Young Heritage Studio, ドイツ

Young Heritage Studioは文化に関心を持たない若者を文化に親しませる試みである。具体的には、研究、学生の調査、ソーシャルメディアの利用、などである。

### (h) Joe Petrosino Museum, Italy

Joe Petrosinoは米国のイタリアからの移民で、ギャング

を取り締まった警官となった。その博物館ではマルチメディアで彼の生涯を紹介している。

### (i) ArtBay, the Netherlands

ArtBayはネットから美術品を集めるゲームで、自分のコレクションを作成するほか、他の参加者とコンテンツを交換したりすることができる。

### (j) Musebooks, ベルギー

Musebooksは美術画集などを見るための電子書籍である。画像中心のレイアウトを提供する。MoMA, 国立故宮博物館などと協力している。教育・研究用にMusebooksProも開発中。

### (k) The Time Traveller's Memory, オランダ

自分が生まれ育ったスロベニアの町Mariborの昔と今の写真を比較することにより、町の再興に生かそうとした。そのためのゲーム、ウェブサイト、モバイル・アプリなどを開発した。

これらのうち、(f)、(i)、(j)はデジタルアーカイブ・コンテンツを商業的に活用しようというものであり、興味深い。

## (3) 大会議事

筆者もENAの会員となって参加したので、投票権がある。現在会員は1900名程度、当日の参加者は名簿に寄れば195名であった。活動報告、決算、予算を承認した。理事の選任は別途ウェブ投票でおこなう。

## 3. 欧州文化フォーラム 2017

ENA総会の翌日から2日間、欧州文化フォーラム2017 (European Culture Forum 2017)が開催された。こちらは欧州委員会 (European Commission) の主催で、2018年に実施される欧州文化遺産年 (European Year of Cultural Heritage) 2018のキックオフの集会であった。

この会議では、欧州委員会や欧州議会の高官、イタリア政府を始めとする各国高官が出席して華やかな会議であった。Europeanaは、事務局長 Jill Cousinsがスピーチを行ったほか、PRビデオを連続して流しており、Europeanaがこの欧州文化遺産年のプラットフォームとして位置づけられていることがわかった。

また催しの一部として、Europeanaを中心とする文化遺産保存と振興にかかわっている若者たちのプレゼンテーションがあり、大変印象に残った。

European Culture Forum 2017の様子



# ハーバード大学での図書館とアーカイブの経験

吉見 俊哉 東京大学大学院情報学環教授

ハーバードに来てもう9ヶ月以上が過ぎ、悲しいかな帰国の日が近づきつつある。今回は紙幅も限られるので、ハーバード大の図書館とアーカイブについて東大と比較しつつ報告する。

こちらに来て最初に知ったのは、大学でのすべての作業がたった1つのサイトに徹底的に統一されていることだった。「ハーバード・キー」というサイトのアカウントを受け取ると、学生も教員も授業、図書館、大学サービス、手続きのすべてが一括してここからできる。授業では、指定文献のダウンロードや毎週の学生のレポートから成績管理まで、このサイトだけでできる。

そしてこのサイトから図書館のアーカイブに入れば、本や論文の検索は勿論、相当量の論文や記事、映像を自分のパソコンにダウンロードできる。文献には日本語のものも数多く含まれ、たとえば朝日新聞、読売新聞のデータベースにもこのサイトを通じて自由にアクセスできる。オンラインで取得できる論文数がとても多いので、必要な文献のかなりが自宅から取得できる。

図書館自体もすばらしく、東大でいえば附属総合図書館に当たるワイドナー図書館は、蔵書数300万冊以上の規模だが徹底した開架式で、総延長92kmに達する書架を自由に見て回れる。来て早々、私は目当ての本を探して書庫を歩く間に迷子になったが、遠くでそれを見つけたライブラリアンがこちらに来て道案内してくれた。受付で何冊まで借りられるのかを聞くと「何冊でも」との答えである。いつまで借りられるのかを聞くと半年後だった。これは教授陣への特別待遇というわけではなく、すべての学生も同じように無制限に半年は借りられる仕組みだという。

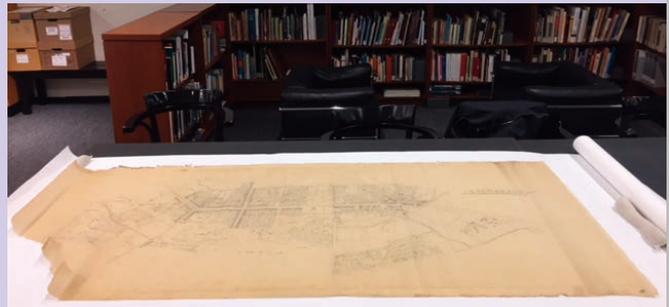
さらに、アーカイブ機能の充実ぶりを示すのが数多くのコレクションで、現在構築中の「丹下健三アーカイブ」はその典型である。もともと丹下の死後、彼が残した膨大な資料群は、長く教えた東京大学が有力な寄贈先候補だった。だが、東京大学の受け入れ体制は余りに未整備で保存環境も悪いことから、遺族はほぼすべての資料を東大ではなくハーバード大学に寄贈することを決めた。頭脳流出ならぬ遺産流出の典型だが、この選択は全く正しかったことが判明する。

私はこの丹下アーカイブがどんなふう運営されているかを見た

と思い、所蔵している建築・デザイン大学院の図書館を訪れた。わかったのは、実に見事な保存・公開体制が実現していることだった。丹下コレクションがハーバード大学に寄贈されたのは2011年。数年ですでに膨大な資料の目録化は終わり、すべての資料はきわめて良い状態で保存されている。大型図面は離れた保存用庫に置かれているが、前述のサイトから申請すれば、翌日には図書館で閲覧できる。

驚嘆すべきはデジタルアーカイブ化の進捗で、すでに相当量の資料がデジタル化されて自由に閲覧可能だ。なぜこの丹下健三アーカイブに限っては誰でも自由に見られるので、ぜひアクセスしてみたい。http://oasis.lib.harvard.edu/oasis/primos?id=des00032  
図書館の担当アーキビストによれば、今は1964年の東京オリンピックでの代々木オリンピック競技場関係の資料のデジタル化を進めているという。この資料群だけで約9000枚の図面があるが、そのすべての図面のデジタル化を進めているそうだ。こうして今や、丹下健三研究をする日本の建築史家は、東京大学など目もくれずともハーバード大学に留学しなければならない時代となった。

率直に言って、彼我の差に茫然とする。保存環境、閲覧・貸出の体制、デジタル化への取り組み、ライブラリアンの地位、アーカイブの役割の認識。すべてで東大は逆立ちしてもハーバードに敵わないのが現状だ。しかもここ20年余で、この差は大きく拡大してしまった。



ハーバード大・丹下健三アーカイブ（上野本郷文教地区計画の図面）

## 活動予定

	2018							2019		
	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
パイロット事業	コンテンツ収集、デジタル化									
								地方自治体、大学、NPOとの連携準備		
シンポジウム、講演会等	1周年記念シンポジウム			2018年度 第1回講演会				2018年度 第2回講演会		
連続セミナー	2018年度連続セミナー（全5回）									
デジタルアーカイブ推進基本法	国会審議状況に応じて、デジタルアーカイブ学会と連携して活動									
関係省庁や業界団体との連携	内閣府、総務省、経済産業省、観光庁、文化庁、東京文化資源会議、デジタル文化財創出機構等と連携して活動									

**デジタルコンテンツの保存・活用に関わる技術的・制度的共通基盤を整備することを目的とした新たな検討委員会の提案が会員社よりあがり、「データ活用の持続可能性検討委員会」として発足することが4月の第11回幹事会にて承認されました。**

## トピックス

- ▶4/25 DAPCON：第11回幹事会開催
- ▶5/8 デジタル文化資産推進議員連盟総会  
「デジタルアーカイブ整備推進法案（仮称）骨子案」の検討。
- ▶5/14-17 European Tech 視察ツアー（蘭口ッテルダム）  
EuropeanTechは各国の文化・研究機関、企業などの技術者・開発者による最新成果や技術動向を共有する会議。DAPCONから3名参加。
- ▶5/22 DAPCON：データ活用の持続可能性検討委員会の発足  
委員長：杉本重雄氏（筑波大学教授）
- ▶5/26 JSDA：第5回定例研究会開催  
・鹿糠敏和氏（岩手日報社編集局報道部長）  
「命の軌跡は訴える～被災地の新聞社とデジタルアーカイブ」  
・中澤敏明氏（東京大学情報理工学系研究科特任講師）  
「自動翻訳の可能性とデジタルアーカイブへ」
- ▶6/13 DAPCON：第4回総会および設立1周年記念シンポジウムの開催  
シンポジウムのテーマ：「コンテンツ流通・利用の発展のために何が必要か」  
パネリスト：福井健策氏（骨董通り法律事務所代表パートナー弁護士）、宮坂学氏（ヤフー取締役社長）、柳与志夫氏（東大大学院情報学環特任教授）